観兵式の会場敷地とその利用形態

近代東京における軍事儀礼に関する研究 その1

SITES AND ITS USAGE PATTERN OF *KANPEISHIKI*

Study on military ceremonial space in modern Tokyo, Part 1

長谷川 香^{*1}

Kaori HASEGAWA

Japanese military parade, *Kanpeishiki*, conducted in the presence of the Emperor, is one of the most significant imperial ceremony in modern Tokyo. This study aims to clarify the characteristics of ceremonial space used for *Kanpeishiki* in modern Tokyo, analyzing temporary use of three parade grounds and the Imperial palace plaza. The findings are as follows: 1) As a ceremonial site, the parade grounds had been used mainly and the Imperial Palace Plaza occasionally due to their different characteristics; and 2) The basic site usage pattern had been formulated and its scale had become larger to accommodate thousands of people.

Keywords : Ceremonial Space, Modern Tokyo, Military Parade, Parade ground, Imperial Palace Plaza,

儀礼空間, 近代東京, 観兵式, 練兵場, 宮城前広場

1 はじめに

1-1 研究の概要

明治に入り、日本では欧米に倣った近代的な軍事制度が導入された。そして、軍備拡張が進められていくなかで、軍隊の礼儀作法や規律とともに、観兵式をはじめとする軍事儀礼が整備されていった。

観兵式とは、軍隊が整列して皇族や陸軍大臣参謀総長陸軍大将、外賓などの閲兵を受ける「閲兵式」と、観閲者らの前を各部隊が順に行進し、敬礼する「分列式」によって構成される儀礼であり、各衛戍地で催された。なかでも、東京衛戍地における観兵式には天皇が臨御し、会場や沿道には万単位の群衆が参集した。観兵式は天皇と参列する兵士のみならず、一般市民とも深く結びついた都市の儀礼であった。

本稿では、近代東京における観兵式の会場敷地として日比谷、青山、代々木の3つの練兵場と宮城前広場が利用されたことに注目し(Fig.1)、その変遷と各敷地の利用形態を検証することにより、都市における軍事儀礼の空間の特質を解明する。

Fig.1 Sites of military parade in modern Tokyo
近代東京の観兵式の会場

1-2 既往研究の整理

(1) 軍事儀礼の重要性

近代東京で催された国家や天皇に関わる儀礼のなかでも、天皇が大元帥として臨御する軍事儀礼は、日本の軍勢力とそれを率いる大元帥の威厳を対外的に示すうえで重要な意味を持った。歴史民族誌の観点から近代日本の国家儀礼について論じたT・フジタニは、明治後期の近代東京の観兵式は、「未曾有の数の陸軍を陸軍や海軍の兵士、武器、戦艦、そして群衆が、国の首都に集合して、自らを天覧に供していった途方もなく巨大なスペクタクル」であったとし、近代日本の視覚的・可視的支配におけるその重要性を説いた¹⁾。

また、首都・東京における軍隊の形成について論じた荒川章二は、東京鎮台と近衛兵という2つの部隊が存在する特殊な状況下にあった東京では、天皇臨御のもと軍事儀礼や演習が数多く実施され、それを府民が目にするにより、天皇を介在させた軍隊と府民の関係が築かれたと指摘している²⁾。

(2) 練兵場と宮城前広場の整備と利用

明治2年の東京奠都以降、東京では江戸の旧武家地等を読み替えながら、大規模な軍用地や官有地、皇室所有の御料地が整備されていった。これらの敷地の近代における成立過程や戦後の用地転用については、主に経済史や都市史、都市計画史の分野で論じられ、その存在が近代以降の東京の都市空間の形成に与えた影響が指摘されてきた³⁾。

なかでも、青山と代々木の練兵場に関しては、近代の東京市西部における主要な軍用地として、近年、地域史・軍事史の観点から研究が進められている⁴⁾。とくに武田尚子は、練兵場における観兵式等の軍事的利用が、主要な行幸路・行軍路となる大山街道(現・青山通り)や周辺地域の整備に影響を与えたことを指摘した。

^{*1} 東京理科大学理工学部建築学科 助教・工博

Assist. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Technology, Tokyo University of Science, Dr.Eng.

他方、宮城前広場は、近代東京において儀礼のために整備された広場として注目されてきた。先のT・フジタニが首都の象徴的、儀礼的中心だと指摘するとともに、都市計画・公園史の観点から越沢明、小野良平らがその整備過程を明らかにしている⁵⁾。また、政治思想史の観点から現代にいたるまでの宮城前広場・皇居前広場の利用を詳細に検証した原武史は、造営当初の「無用の長物」から、近代天皇制の儀礼が行われる「聖なる空間」を経て、戦後、「空虚な中心」となるに至った広場の変容を解き明かした⁶⁾。これらの既往研究では、明治22年の憲法発布記念式の際に初めて広場が鹵簿の奉迎場所として利用されたこと、そして明治39年の陸軍凱旋観兵式を理由に凱旋道路が整備されたことが、広場の整備史における画期として位置付けられている。

1-3 本稿の位置付けと構成

このように既往研究では、近代東京における観兵式の特異性や重要性が指摘されるとともに、それらが契機となって会場敷地や東京市西部の整備が進められたことが論じられてきたが、都市的観点から近代東京における観兵式を通史的に把握し、その儀礼空間を総体的に捉える試みはなされていない。しかしながら、観兵式は近代東京において広大な面積を占めた練兵場と宮城前広場で催されたのであり、それらの儀礼空間としての利用の実態を解明することは、大元帥の住まう軍都として近代東京を捉え、その都市空間の形成を理解するうえで重要だと考えられる。

そこで本稿では、近代東京における儀礼空間の一端を明らかにすることを目的とし、近代天皇制のもと、明治初期～昭和20年に東京で実施された観兵式の儀礼会場を分析する。まず2節にて本稿の前提となる観兵式の成立過程と会場敷地となった練兵場と宮城前広場の整備過程を把握したうえで、3節にて観兵式の次第と敷地の変遷を整理し、4節にて観兵式における各敷地の利用形態を検証する。そして、5節にてこれらの分析を総括し、近代の観兵式における儀礼会場を通史的に捉え、その儀礼空間としての特質を考察する。

なお、都市における儀礼の実態を捉えるうえで、儀礼会場のみならず、そこにいたるまでの行幸啓経路も重要であることから、本稿では両者を合わせて「儀礼空間」という用語を用いる。本稿では主に会場の利用を分析対象とし、行幸啓経路については概要しか触れないが、その詳細な経路と変遷は別稿にて検証することとする。

1-4 観兵式の実施状況と次第に関する資料

観兵式の実施状況の把握に際しては、『明治天皇紀』、『大正天皇実録』及び『昭和天皇実録』を用いる⁷⁾。各天皇紀には、式の実施日と開催理由、会場、中止の場合にはその理由が記載されている⁸⁾。

そして、式の具体的な次第や敷地の利用形態の分析においては、式の実施に際して軍部が作成した次第書を用いる。これらの次第書は、陸海軍省の公文書（防衛省防衛研究所所蔵）として残されるか、もしくは当時の『官報』に掲載されている場合もある。次第書には式の手順が記されるとともに、玉座や隊列の配置を示す隊列図が添付されており、その時代的な変遷を追うことが可能である。

なお、本稿で扱う敷地・施設は時代によって名称が異なるものもあるが、その場合は言及する年代における呼称を用いる⁹⁾。

2 観兵式の成立と練兵場、宮城前広場の整備

2-1 観兵式の成立過程

日本における観兵式の起源は、明治初期にまで遡る。『明治天皇紀』の明治3年1月17日の条に、天皇が「軍神を皇城に祭り、練兵を覧たまふ…実に是れ後年陸軍始の濫觴なり」とあるように¹⁰⁾、観兵式の嚆矢とされる関兵は、軍神の祭祀とともに催された。廃藩置県前で鎮台兵が存在しなかったため、参加兵は鹿児島、高知両藩の兵士を中心とした御親兵であった。以後、軍神の祭祀は行われなくなり、東京鎮台と近衛兵らが参加する軍事儀礼のみが残り¹¹⁾、年始の陸軍始（1月8日頃）と天皇の誕生日である天長節（大正期のみ天長節祝日）における実施が恒例化するとともに¹²⁾、国家や皇室に関わる慶事や、国賓歓迎の際に臨時で挙行されるようになっていった。

当初、これらの儀式は「飾隊式」と呼ばれていたが、明治13年に「観兵式」と改称され、「観兵式仮規則」によってその手順や配列などが定められた¹³⁾。同20年には仮規則が廃止され、観兵式をはじめとする軍隊の儀礼や礼儀作法全般に関する「陸軍礼式」が定められ¹⁴⁾、同24年には隊列図などを用いて観兵式の手順を詳細に記した「陸軍礼式附録」が出された¹⁵⁾。その後、礼儀作法が一層厳格化され、昭和15年に軍令として「陸軍礼式令」が定められた¹⁶⁾。

このように、明治初期に導入され、軍部において重要な礼式として定着していった観兵式は、一方で、市民にとっては天皇の大規模な鹵簿を目にする貴重な機会でもあった。4節にて後述する通り、式当日、練兵場と行幸路の沿道には万単位の手観者が押し寄せた。観兵式は大元帥として臨御する天皇と関兵を受ける兵士だけでなく、一般市民をも巻き込んだ都市の一大イベントであったと言える。

2-2 練兵場と周辺地域の整備

練兵場とは、軍隊が操練・演習を行うために設けられた軍事施設である。近代東京において広大な面積を占めた練兵場は、明治から昭和戦前にかけて移転を繰り返した。

まず、明治4年夏頃、東京府下初の練兵場が皇城近郊の日比谷に設置された。当初は「陸軍操練場」と呼ばれ、敷地は内堀沿いの北側の敷地のみであったが、後に南側に拡張され、「日比谷練兵場」と呼称されるようになった（Fig. 1）¹⁷⁾。明治11年には竹橋に営の近衛砲兵隊による武装反乱、いわゆる竹橋事件が勃発し、練兵場が皇城に近接することへの懸念が強まり、さらに丸の内一帯の市街化する計画が進められた結果、同20年、練兵場は青山へと移転された。その後、青山練兵場が手狭になるとともに、明治末に企画された日本大博覧会の会場敷地とされたため¹⁸⁾、同42年には倍近い規模を持つ代々木練兵場が新設されるにいった。

これらの面積を比較すると、設置当初の日比谷練兵場は約19ha、拡張後は約32ha、青山練兵場は約47ha、代々木練兵場は約92haであり、練兵場は時代とともに規模を拡大させながら、皇城・宮城から遠ざかるように西方へと移転していったことが分かる（Fig. 1）。

こうした練兵場の整備・移転は、周辺地域の開発にも大きな影響を与えた。とくに、宮城と青山練兵場、代々木練兵場をつなぐ大山街道沿いには、近世における駒場野の鷹場や目黒の火薬製造所などを転用しながら軍事学校や兵営など多くの軍事施設が置かれたため、観兵式や軍事演習に伴う行幸・行軍が頻繁に行われるようになり、軍事的な重要性が高まった。その整備過程は武田尚子の論考に詳しいが、陸軍省が内務省に働きかけた結果、大山街道は市区改正において2等道路に位置づけられ、明治末までに赤坂見附から青山7丁目までが整備されるとともに、明治42年の代々木練兵場設置以後

は、練兵場整備の一環として青山7丁目から宮益坂にかけて道路拡張や宮益橋の架け替えが行われた (Fig. 1)。

このように、練兵場は東京中心部の開発や軍事的・政治的な要因に影響を受けながら、規模を拡大させつつ西方へと移転した。そして、それと連動するかたちで、宮城と練兵場をつなぐ大山街道とその周辺地域の整備が進められていった。

2-3 宮城前広場の整備

一方の宮城前広場は、東京市の中心部において約 47ha と広大な面積を有したが、練兵場とは異なり、特定の用途を持たない「広場」であった。その整備過程は先述の越沢、小野らの研究に詳しいが、広場となる敷地は、江戸時代には西丸下 (西の御丸下) と呼ばれた区域であり、老中や若年寄の役屋敷と会津藩・忍藩の両松平家の屋敷などが置かれていた。明治に入り、元老院や公家関係、軍・警察関係の諸施設が設置されたが、明治 13 年には宮内省所管となって徐々にそれらの施設が撤去され、同 20 年に皇宮地附属地に編入された。そして、同 22 年の大日本帝国憲法発布記念式典とそれに伴う観兵式に間に合うよう、3 つの芝庭と幅広い道路から構成される宮城前広場が整備された。また、同 39 年の日露戦争凱旋大観兵式 (青山練兵場にて実施) を機に、広場を南北方向に横断する「凱旋道路」とそれと直行する道路が新設されるとともに、内濠が一部埋め立てられたことにより、広場はより多くの群衆を収容することが可能となった。さらに、昭和 15 年には紀元 2600 年記念事業として広場の修景が行われ、記念式典の会場として利用された。

このように、広場の整備は明治20年代以降、観兵式をはじめとする儀礼の開催が大きな契機となって進められたが、明治中期から大正期にかけては儀礼会場としてではなく、会場へと向かう鹵簿が通過し、それを市民が奉送迎するための場所として利用されることの方が多かった。原武史が指摘したとおり、広場が儀礼会場として頻繁に利用され、「聖なる空間」と認識されるようになるのは大正末以降のことであった¹⁹⁾。

3 会場敷地の変遷

以上に見た各敷地の整備過程を踏まえうえて、本節では、これらの敷地で催された観兵式の実施状況について把握する。Table. 1 は、明治初期から昭和戦前までに東京で開催された観兵式について、各天皇紀と当時の『官報』をもとに開催時期、開催目的等を整理したものである²⁰⁾。以下、観兵式の敷地に注目して 5 つの時代区分 (第 I ～ V 期) に分け、その変遷を追う。

3-1 第 I 期 (明治 3 年～同 4 年) : 皇城・皇城周辺の利用

明治 3、4 年に挙行された観兵式の嚆矢とされる閼兵は、皇城内の本丸跡とその周辺にて実施された。

2 節で見たように、『明治天皇紀』の明治 3 年 1 月 17 日の条には「軍神を皇城に祭り、練兵を覧たまふ」とあり、本丸跡で軍神祭が行われた後、天皇は兵士らを天覧した。翌年 1 月 8 日の条には「去年正月一七日、始めて軍神を祭りて振武を禱りたまひ、以て新年の例式と為すことに内定せしが、今年より軍神祭を停止し、其の祭式の一部たりし陸軍練兵のみを皇城本丸跡に於て挙行することとし…」とあり²¹⁾、前年を踏襲して本丸跡で新年の閼兵が実施されるとともに、それを毎年恒例行事とすることが決められた。

つづく翌年 4 年 9 月 22 日の天長節の条には、「和田倉門外より馬

Table 1 Chronological Table of Military Parade in Tokyo
近代東京における観兵式の実施状況

Year (年)	Imperial Palace and its environs (皇城・皇城周辺)	Hibiya Parade Ground (日比谷練兵場)	Aoyama Parade Ground (青山練兵場)	Yoyogi Parade Ground (代々木練兵場)	Imperial Palace Plaza (宮城前広場)	
1870 (明治3年)	●	Before establishment (練兵場未整備)				1 st Period (第I期)
1871 (明治4年)	●◆					
1872 (明治5年)		●◆◆				
1873 (明治6年)		●◆				
1874 (明治7年)		●◆				
1875 (明治8年)		●◆				2 nd Period (第II期)
1876 (明治9年)		●◆				
1877 (明治10年)		●◆				
1878 (明治11年)		○◆	Before establishment (練兵場未整備)		Before establishment (広場未整備)	
1879 (明治12年)		●◆▲▲				
1880 (明治13年)		●◆				
1881 (明治14年)		●◆▲				
1882 (明治15年)		○◆				
1883 (明治16年)		●◆				
1884 (明治17年)		○◆				
1885 (明治18年)		○◆				3 rd Period (第III期)
1886 (明治19年)		●◆		Before establishment (練兵場未整備)		
1887 (明治20年)		●◆	◆			
1888 (明治21年)			●◆			
1889 (明治22年)			●◆★			
1890 (明治23年)			○◆			
1891 (明治24年)			○◆△			
1892 (明治25年)			●◆			
1893 (明治26年)			●▲			
1894 (明治27年)			●★			
1895 (明治28年)			○			
1896 (明治29年)			◆			
1897 (明治30年)			○			
1898 (明治31年)			○			
1899 (明治32年)			●◆			
1900 (明治33年)			○◆			
1901 (明治34年)			○◆			
1902 (明治35年)			○◆▲			
1903 (明治36年)			●◆			4 th Period (第IV期)
1904 (明治37年)			●◆			
1905 (明治38年)						
1906 (明治39年)			◆★			
1907 (明治40年)			●◆			
1908 (明治41年)			○◆			
1909 (明治42年)			●◆			
1910 (明治43年)			●◆			
1911 (明治44年)			○◆			
1912 (明治45年/大正元年)			○			
1913 (大正2年)			◆			
1914 (大正3年)			○			
1915 (大正4年)			○★			
1916 (大正5年)			○		●	
1917 (大正6年)				◆	●	
1918 (大正7年)				○	●	
1919 (大正8年)				◆★	○	
1920 (大正9年)				◆	○	
1921 (大正10年)				●◆		5 th Period (第V期)
1922 (大正11年)				●◆		
1923 (大正12年)				○		
1924 (大正13年)				●◆		
1925 (大正14年)				●◆		
1926 (大正15年/昭和元年)				●◆		
1927 (昭和2年)						
1928 (昭和3年)				●◆★		
1929 (昭和4年)				●◆		
1930 (昭和5年)				○◆		
1931 (昭和6年)				○◆		
1932 (昭和7年)				●◆		
1933 (昭和8年)				●◆		
1934 (昭和9年)				◆		
1935 (昭和10年)				○◆		
1936 (昭和11年)				○◆		
1937 (昭和12年)				◆	●	
1938 (昭和13年)				●◆		
1939 (昭和14年)				●◆		
1940 (昭和15年)				●★		
1941 (昭和16年)				○◆		
1942 (昭和17年)				●◆		
1943 (昭和18年)				●◆		
1944 (昭和19年)				●◆		
1945 (昭和20年)					●	
Number of times implemented (実施回数)	3	32	33	40	5	
Number of times cancelled (中止回数)	0	5	19	8	2	
Total number of times (合計回数)	3	37	52	48	7	

(Legend) ●:Rikugunhajimu(implemented) ◆:Tenchosefus(ditto) ▲:VIP reception(ditto) ★:Others(ditto)
○:Rikugunhajime(cancelled) ◇:Tenchosefus(ditto) △:VIP reception(ditto) ☆:Others(ditto)
(凡例) ●:陸軍始(実施) ◆:天長節(実施) ▲:国賓歓迎(実施) ★:その他(実施)
○:陸軍始(中止) ◇:天長節(中止) △:国賓歓迎(中止) ☆:その他(中止)

場先・日比谷・櫻田・半蔵諸門外に整列せる御親兵一番より九番に至る各大隊（四番大隊を欠く）及び第二聯隊第一大隊並びに騎兵隊を車上より天覧あらせらる」とあり²²⁾、特定の会場敷地はなく、天皇は内濠沿いの道路を移動しながら閲兵したことが分かる。

当時は東京奠都から間もなく、近代的な軍事整備が開始された時期にあたり²³⁾、軍用地が十分に確保できていなかったため、暫定的に皇城とその周辺の道路を利用して観兵式が行われたと言える。

3-2 第Ⅱ期（明治5年～同20年）：日比谷練兵場の利用

明治4年の日比谷練兵場設置以降、同5年陸軍始から同20年陸軍始までの全32件の観兵式は、日比谷練兵場で行われた。

日比谷練兵場における最初の観兵式である明治5年1月8日の陸軍始について、『明治天皇紀』には、練兵場で式を行った後、「還幸の途次、日比谷門付近より兵部省に至る間、路傍に整列せる東京鎮台兵…を閲し」たとの記述がある²⁴⁾。観兵式の会場は確保されたものの、第Ⅰ期における内濠沿いでの閲兵が継承され、会場外の行幸経路沿いにも兵士が整列していたことが分かる。

つづく同年9月22日の天長節の際にも、「西丸大手門を出で、途上東京鎮台兵の整列せるを観たまひつつ桜田門を出で」とあり²⁵⁾、やはり行幸経路沿いに兵士が整列して閲兵が行われたことが確認できるが、以後の『明治天皇紀』では、観兵式の際に沿道における閲兵に関する記述は見られなくなることから、明治6年以降は練兵場における観兵式が主となったと考えられる。

2節で述べたとおり、基本的な陸軍の礼式と観兵式に関する規則は明治10年代から20年代にかけて定められており、また4節にて後述するが、式の次第もこの時期に定式化したことを考慮すると、日比谷練兵場が会場とされたこの第Ⅱ期は、練兵場における観兵式の確立期と捉えることができる。

なお、この時期の観兵式は、陸軍始と天長節以外では、国賓歓迎の際に催されるのみであった。

3-3 第Ⅲ期（明治20年～大正4年）：青山練兵場の利用

明治20年の青山練兵場設置後、同年11月の天長節から大正4年12月の大正大礼まで約30年間の観兵式は、青山練兵場にて行われた。明治42年に代々木練兵場が開設されたにも関わらず、以後6年間は、青山練兵場が継続して利用されたことが指摘できる。

大正4年の青山練兵場での観兵式の実施について報じた新聞には「代々木は行幸道路なく、地均しに不便な為見合わせ」とあり²⁶⁾、代々木練兵場での開催が検討されたものの、大山街道をはじめとする周辺道路の整備状況と、代々木練兵場の起伏の多い地形が問題となり、青山練兵場の利用が継続されたことが分かる。周辺道路の整備は徐々に進められて行ったが、後者に関しては、そもそも練兵場の常時の用途は「軍隊の操練の場」であり、軍事演習においては起伏に富んだ地形の方が適しているため、観兵式の挙行を優先して敷地を平坦にすることは難しかった²⁷⁾。こうしたなかで、大正3年には明治神宮外苑の造営地が青山に決まり、造営準備が始まったことから同練兵場の使用が不可となり、観兵式の敷地は代々木へと移行したものと考えられる。

なお、T・フジタニが指摘するとおり、この時期は東京でのページェントが確立された時期にあたり²⁸⁾、大日本帝国憲法発布の記念式典（明治22年）、日露戦争後の陸軍凱旋大観兵式（明治39年）、大正大礼観兵式（大正4年）といったように、観兵式が国家や皇室

の慶事に伴って催されるようになったことが特徴として挙げられる。

また、明治天皇の崩御後、大正元年以降は大正天皇が観兵式に臨御するようになったが、Table.1 から分かるとおり、大正元年から同4年までは、大正大礼に伴う観兵式が開催されたのみである。大正2年までは喪中により非開催となったが、大正3年の陸軍始は喪が明けたにもかかわらず開催されなかった。その理由について、「大正天皇実録」には「御都合に依り」とあるが²⁹⁾、当時の新聞では、天皇の体調悪化を危惧した「侍従職より伏見内大臣宮殿下まで伺ひ出でたる結果」中止となり、当局では「将来之を機会に観兵式は一年を通じて天候の最も温和なる季節を選び行はせらるること」を検討中だと報じられている³⁰⁾。

一方、観兵式以外にも多くの儀礼が行われる天長節に関しては、大正天皇の誕生日である8月31日は「大暑中ニテ御儀式ヲ挙クル事困難」であることから³¹⁾、大正2年、新たに10月31日に天長節祝日を設けて、それまで天長節に行っていた諸儀礼を執り行うこととした。病気がちな大正天皇の体調を考慮し、観兵式の時期や方法を見直す必要性が生じたと言える。

3-4 第Ⅳ期（大正5年～9年）：代々木練兵場と宮城前広場の併用

大正5年の陸軍始から同9年の天長節祝日までの約5年間は、大正天皇が大元帥として観兵式に臨御した時期の後半にあたる。この間、陸軍始は宮城前広場、その他の観兵式は代々木練兵場で開催され、2つの敷地が併用された。このように、本来は軍用地ではない宮城前広場が軍事儀礼の会場とされた背景には、先述した大正天皇の体調への配慮があった。当時の新聞報道では、厳寒の中実施される1月の陸軍始の日程を、気候が穏やかな4月または5月に変更する説が有力と報じられたが³²⁾、最終的には日程ではなく、会場が変更されるにいたった。大正天皇が初めて大元帥として臨御した大正5年の観兵式について報じた記事には、「宮内省側より長時間寒気に玉体を曝させ玉ふは恐れ多ければ万一を慮りせめては宮城前に変更」とあり³³⁾、行幸経路を短縮させるため、宮城前広場が選定されたことが分かる。

また、原武史による宮城前広場の時代区分と照らし合わせると、この時期は、広場が「無用の長物」から「聖なる場所」へと変化していった時期と合致する。原は、観兵式における宮城前広場利用の背景には、大正天皇の体調への配慮のみならず、前年の大正大礼の際に広場で市民が松によじ登るなどしたことから、政府は厳かな観兵式を催すことにより、広場が特別な場所であることを市民に示す意図があったと指摘している³⁴⁾。

3-5 第Ⅴ期（大正10年～昭和20年）：代々木練兵場の利用と宮城前広場の臨時的利用

裕仁親王が摂政に就任した大正10年以降の観兵式は、その大半が代々木練兵場で行われ、昭和12年と同20年の陸軍始のみ宮城前広場が利用された。その理由はどちらも『昭和天皇実録』に記されており、同12年の陸軍始は「代々木練兵場に隣接する東京衛戍刑務所に2・26事件の被告が収監されており、晴れの儀式に相応しくないこと、また第一師団の将兵が満州に派遣されて出場人員が少ないこと、さらに銀座・渋谷間は地下鉄工事中のため青山通りが鹵簿の通過に不便」であるため宮城前広場に変更された³⁵⁾。また、同20年の陸軍始は「防空上の見地から式場を宮城前に変更、開始時刻を繰り上げるとともに、所要時間も短縮」された³⁶⁾。

Fig.2 Layout plan of Tenchosetsu in 1873
明治6 年天長節

Fig.3 Layout plan of parade for U. S. Grant in 1879
明治12 年グラント將軍歓迎※上が南

Fig.5 Layout plan of Tenchosetsu in 1887
明治20 年天長節※上が西

Fig.4 Layout plan of Tenchosetsu in 1879 [left: plan1 review of emperor, middle: plan2 parade, right: plan3 send-off of emperor]
明治12 年天長節 [左: 「第一図」 閱兵時、中央: 「第二図」 分列式時、右: 「第三図」 奉送時] ※上が東

両者とも主に政治的・軍事的な理由により、代々木練兵場での開催に不都合があるため、宮城前広場が臨時で利用されたとと言える。

4 式の次第と会場敷地の利用形態

以上のように、明治初期から昭和戦前にかけて、観兵式の敷地は皇城・皇城周辺から日比谷・青山・代々木の練兵場へと移り変わり、ときに宮城前広場が利用されることもあった。本節では、これらの敷地における式の次第と利用形態について、各天皇紀や軍部作成の次第書を用いて検証する。

なお、隊列図を縮小して掲載するにあたり、玉座位置に◎を付すとともに、隊列以外の陪覧者のスペースを点線で囲い、軍関係の陪覧者にはA、学生の陪覧者にはB、一般陪覧者にはGと記した。

4-1 皇城・皇城周辺

明治3、4年に挙行された観兵式の嚆矢とされる閱兵に関しては、軍部作成の次第書は残されていない。

前節で見たとおり、明治3年1月17日の閱兵は、軍神祭とともに本丸跡で行われた。『明治天皇紀』では軍神祭の手順は詳述されるものの、閱兵に関しては「練兵を天覧あらせらる」という記述のみであり、明治4年の天長節に関する記述もほぼ同様である³⁷⁾。

これらの記述には兵士の行進や分列式に関する描写はなく、なおかつ練兵場として整備されていない皇城内や路上ではそのような行為は難しかったであろうことから、当時の閱兵は天皇が整列した兵士を天覧する行為が主であったと考えられる。

4-2 日比谷練兵場

日比谷練兵場で行われた観兵式のうち、次第書が確認できるのは明治5年、6年、12年、13年、17～20年の全10件である³⁸⁾。

まず、明治5年、6年の次第書では、兵士は会場または行幸経路にて整列することと併せて、天皇が出門した際は祝砲を上げ、会場に到着する際には奏樂することが記されるのみで、式自体の手順に関する記述はない。明治6年の次第書には図面が添付されているが、

整列したときの隊列図 (Fig. 2) のみである。先に見た皇城・皇城周辺における式と同様に、当時は整列した兵士を天皇が天覧するのみで、分列式は行われなかった可能性が高い。なお、隊列図より、各部隊は敷地の内周に沿って整列していたことが分かるが、方位と天皇の位置が示されておらず、玉座の位置は不明である。

明治12年以降の次第書では、天皇が出門してから、練兵場に到着し、各部隊が整列して閱兵を受けた後、分列式を行い、解散するまでの流れが10項目以上にわたって記述されるとともに、式の手順に沿って2点または3点の隊列図が添付されており³⁹⁾、式の次第の詳細を知ることができる。

式の概要について明治12年天長節を例に説明すると、各部隊は敷地の3辺に沿って整列して閱兵を受け (Fig. 4「第一図」閱兵時)、続いて天皇の前を順に通り返るよう時計回りに行進して分列式を行

い (同「第二図」分列式時)、最後は天皇と正対するように各部隊が横に並んで奉送する (同「第三図」奉送時)、という手順である。このような次第と隊列図は明治12年から同20年まで共通していることから、敷地の利用形態がほぼ定式化したことが分かる。ただし、各年代の閱兵時の隊列図における玉座の位置を比較すると、明治12年のグラント將軍歓迎では敷地北側 (Fig. 3)、同年の天長節

Fig.6 Nawabari plan of Hibiya Parade Ground in 1879
明治12年日比谷練兵場の縄張設置案※上が南

では東側 (Fig. 4「第一図」)、同13年の天長節以降は西側となっていることから (Fig. 5)、当初は玉座の位置が定まっておらず、明治13年頃から西側に設置することが慣習化されたことが読み取れる。

また、グラント將軍歓迎の隊列図には、玉座の脇に「幼年学校生徒」「教導団生徒」と記されており、天皇と兵士以外にも軍学校の生徒が陪覧していたことが分かる。同観兵式に際し、陸軍卿や工兵、警視庁の間で交わされた文書によると⁴⁰⁾、それまでの日比谷練兵場における軍隊の操練や観兵式では「場内ニ於テ縦覧人混雑」して不都合であったことから、陸軍省では警視庁と調整のうえ、場内の一部に縄張を設け、一般市民は其中で見学させることとした。Fig. 6は陸軍卿から工兵に宛てた縄張の設置を指示する文書に添付された図面だが⁴¹⁾、縄張 (図中点線箇所) が練兵場の北、東、南の外周に沿って配置されていることが分かる。隊列図に一般陪覧者のスペースが表記された事例は確認できなかったものの、明治10年代前半には既に多くの市民が観兵式の会場に参集していたことが指摘できる。

4-3 青山練兵場

明治20年から大正5年まで青山練兵場で催された全33件の観兵式のうち、27件の次第書は当時の『官報』または陸海軍文書、公文類聚に収められている⁴²⁾。

式の手順については、明治20年までに日比谷練兵場で定式化したものが踏襲されており、約30年間で大きな変化はない。

一方、敷地の利用形態に関しては、前項で見た明治12年以降の日比谷練兵場での観兵式同様、次第書に添付された閲兵時・分列式時・奉送時の3点の隊列図から知ることができる。各年代の隊列図を比較すると、基本的な隊列の組み方は日比谷練兵場での配置が踏襲され、玉座は常に敷地東側に設置されていたが、その他の点においては時代とともに若干の変化が見られた。以下、明治22年天長節、同37年天長節、大正4年天長節の閲兵時の隊列図を用いて、変化した要素を検証する (Fig. 7~9)⁴³⁾。

1点目の変化として、隊列の占めるスペースの拡張が挙げられる。各時代の隊列図に注目すると、明治20年代は敷地境界から余裕を持って部隊が配置されていたが、時代が下るにつれ参加する兵士の数が増え、大正期には敷地を最大限に使って隊列が組まれていることが分かる。公式記録には参列した兵士数は記録されていないが、当時の新聞報道によると、例年の陸軍始や天長節では6,700人⁴⁴⁾、明

治39年日露戦争後の凱旋観兵式の際は31,203人⁴⁵⁾、大正3年の大正大札観兵式の際には38,915人にも及んだという⁴⁶⁾。

2点目として、陪覧者用スペースとその配置にも変化が見られる。明治20年代には、玉座が置かれた敷地東側に軍関係者と学生の陪覧者スペースのみが表記されていたが、同30年代頃からはごくわずかなではあるが敷地南東の大学校との境界付近に一般陪覧者用スペースが直線距離で120メートル程確保されるようになり、明治40年代以降は敷地の北と西の境界線に沿うように約850メートルに渡って配置され、その規模は拡張していった。

陸海軍文書を確認すると、明治30年代頃から、陸軍省に対し、東京府内の学校から職員と生徒の団体拝観の許可を求める請願書が多く提出されるようになり⁴⁷⁾、明治33年には一般拝観者に対して事前に配布する陪覧証の発行部数増刷について、陸軍省が参謀本部に問い合わせた記録がある⁴⁸⁾。陪覧証が発行されるようになった時期は定かではないが、明治37年の陸軍始に際し、陸軍省から大臣官房に宛てた文書に「観兵式陪覧証三、五〇〇枚印刷相成度」とあり、また同年の天長節では「今回の観兵式の盛容を拝観せんと希望する者甚だ多く既に陪覧証を発したる数六千、学校生徒に許可したるもの一万以上合計一万六千以上の多きに上りたるも尚ほ希望のもの多きを以て陸軍大臣も取締りの附く上は可成其希望に達せしむべしとの意見なりしかば昨今倍濫増刷中」と報じられており⁴⁹⁾、とくに日露戦争中は拝観希望者が急増したことが分かる。

そして3点目として、大正元年以降は、明治天皇大喪儀の式場設営による影響が見受けられる。大正4年の隊列図には、敷地北側に記念碑記号が付された建物と、そこから練兵場の南側の入り口へと延びる通路が描かれているが、これらは大正元年の明治天皇大喪儀で設置された葬場殿と通路の位置と合致しており⁵⁰⁾、その跡だと考えて間違いのない。観兵式における隊列は、葬場殿跡と通路を避けるように配置されており、大喪儀以後、練兵場の敷地利用に制約が生じたことが指摘できる。

このように、約30年間で青山練兵場の基本的な敷地の利用形態に大きな変化はないが、時代とともに参列する兵士数が増え、とくに明治30年代以降は一般陪覧者数も増加していった。そして明治天皇大喪儀後は、敷地に葬場殿と通路の跡が残されたことも影響し、式を挙げるには敷地が手狭な状況になっていたことが指摘できる。

Fig. 7 Layout plan of Aoyama Parade Ground Tenchosetsu in 1889
青山練兵場の利用形態 [明治22年天長節]

Fig. 8 Layout plan of Aoyama Parade Ground Tenchosetsu in 1904
青山練兵場の利用形態 [明治37年天長節]

Fig. 9 Layout plan of Aoyama Parade Ground Tenchosetsu in 1915
青山練兵場の利用形態 [大正4年天長節]

4-4 代々木練兵場

大正6年から昭和20年までに代々木練兵場で開催された全40件の観兵式のうち、次第書が残されているのは7件であり、それらは全て陸海軍文書に収められている⁵¹⁾。各年代の次第書を比較すると、隊列図はやはり閲兵時・分列式時・奉送時の3点が添付されており、式の次第と基本的な隊列の組み方は日比谷練兵場、青山練兵場とほぼ同様である。しかし、敷地の利用形態には、「軍隊の操練の場」としての性格が強い代々木練兵場特有の現象が見られるとともに、時代ごとに若干の変化が読み取れる。以下、大正6年の天長節、昭和3年の陸軍始、同13年の陸軍始の閲兵時の隊列図を用いて、利用形態の特徴とその変遷を検証する (Fig.10~12)⁵²⁾。

まず、隊列の配置に関しては、日比谷練兵場と青山練兵場では敷地の境界線ぎりぎりまで広がっていたのに対し、代々木練兵場は土地の起伏が激しく、池等があるため、そうした既存の地形を避けるように部隊が並び、玉座は敷地北東に置かれていた。例年の陸軍始と天長節に関しては兵士の参列人数の記録はないが、昭和3年の昭和大礼観兵式では34,634名⁵³⁾、昭和15年の紀元2600年記念観兵式では約43,000名にものぼっており⁵⁴⁾、青山練兵場における最大人数を上回っている。敷地全体を利用できてはいないものの、青山練兵場と比較すると敷地面積が2倍近くあることから、隊列のスペースは十分に確保できていたと言える。

次に、青山練兵場で時代とともに拡張した一般陪覧者用スペースとその配置については、代々木練兵場でも同様の変化が認められる。大正6年の時点では、一般陪覧者席は敷地の北、東、南側の敷地境界付近に6カ所に分かれ、直線距離にして合計約600メートル設けられていたが、昭和に入ると敷地北東も含め、玉座の背後を除いて敷地の外周を取り囲むように合計約1.6キロメートルとなり、大きく拡張されている。ちょうどその過渡期にあたる大正8年の天長節観兵式の際の新聞記事では、「昨年迄は一般拝観席が至って狭隘なりしを警視庁ではなるべく一般人に拝観させたいとの希望から陸軍省で衛戍総督と協議の上、陪覧者スペースを拡張したと報じられており、式を実施する側の軍部と警備する側の警視庁が、一般陪覧者の

利便性を配慮していたことが分かる。一般陪覧者数に関しては、兵士の参列人数同様、例年の陸軍始、天長節の記録は残されていないが、平和記念観兵式では18,500人⁵⁵⁾、紀元2600年記念観兵式では2万人にものぼり⁵⁶⁾、青山練兵場における収容人数を上回った。

そして注目すべきは、玉座の北東側もしくは東側に近接して表記される小さな区画である (Fig. 10~12)。この区画はどの時代にも共通して描かれており、とくに注記は付けられていないが、その位置から、大正3年に営まれた昭憲皇太后大喪儀の葬場殿跡地に建てられた石碑と判断できる⁵⁷⁾。この石碑は、皇太后崩御翌年の大正4年に東京府が発案し、陸軍省に跡地12尺四方の区画の無料使用許可を得たうえで、大正7年に建てられたものである⁵⁸⁾。観兵式の際に玉座が葬場殿跡の石碑の脇に設置され、それを避けるように隊列が組まれた背景には、行軍がしやすいよう実務的な判断があったと考えられるが、石碑建立前の大正5年の観兵式を報じた記事に「先ず玉座の位置は昭憲皇太后葬場殿跡に西南に面して造らへ」と記されていることから⁵⁹⁾、石碑がなく、行軍上不便がない状況下においても葬場殿跡が意識され、玉座と隊列の位置が定められたと言える。

4-5 宮城前広場

宮城前広場で実施された観兵式は、大正5~7年と昭和12年、同20年の陸軍始の計5件である。このうち、次第書が残されているのは大正期の観兵式のみである⁶⁰⁾。そのため、資料の制約により大正期の検証しかできないが、これらの次第書より、日比谷練兵場で定式化した次第が宮城前広場でも踏襲されていたことが確認できる。

また、敷地の利用形態に関しては、やはり次第書に添付された閲兵時・分列式時・奉送時の3点の隊列図より知ることができる。玉座と隊列から構成される基本的な配置はこれまで検証してきた3つの練兵場と同様だが、宮城に隣接し、敷地内に芝生を有する宮城前広場にしか見られない特徴も見出せる。以下、大正5年の陸軍始と同8年の陸軍始における閲兵時の隊列図を用いて、その特徴と時代とともに変化した要素を検証する (Fig. 13、14)⁶¹⁾。

まず、玉座の位置は二重橋のすぐ脇に置かれた。天皇は宮城を背にして参列者と対峙することができる位置であり、宮城に隣接する

Fig.10 Layout plan of Yoyogi Parade Ground Tenchosetsu in 1917

代々木練兵場の利用形態 [大正6年天長節]
※上：全体 下：玉座部分拡大

Fig.11 Layout plan of Yoyogi Parade Ground Rikugunhajime in 1928

代々木練兵場の利用形態 [昭和3年陸軍始]
※上：全体 下：玉座部分拡大

Fig.12 Layout plan of Yoyogi Parade Ground Rikugunhajime in 1938

代々木練兵場の利用形態 [昭和13年陸軍始]
※上：全体 下：玉座部分拡大

儀礼空間として、宮城とそれを象徴する二重橋との位置関係が重視されたものと思われる。また、二重橋前の付近は小丘となっており、観兵式に際しては「諸部隊の行動を一眸の下に集め」ることができたといひ⁶²⁾、敷地の高低差も玉座位置を決定付ける大きな要因となったであろうことが指摘できる。

隊列と陪覧者用のスペースの配置に関しては、これまで見てきた3つの練兵場とは若干異なる点が認められる。練兵場では、閲兵時の隊列は地形などを考慮して使用可能な範囲に最大限広がり、余った場所で線上に陪覧者のスペースが確保されていたのに対し、宮城前広場では玉座近くの2つの芝生地に軍関係者と学生の陪覧者スペース、楠木正成像がある敷地南西側の芝生地に一般陪覧者のスペースが確保され、閲兵時の隊列は一般陪覧者のスペースを避けるように組まれている⁶³⁾。この一般陪覧者のスペースは、大正5年には銅像前方に置かれていたが、同7年には銅像後方の土手部分が追加され、拡張されている。当時の新聞は、代々木練兵場と比べて敷地が狭隘であるため、隊列は「其の間隔を緊縮」する必要がある一方で、「一般陪覧者の便利」は良くなったと報じている⁶⁴⁾。参列した兵士は15,000~20,000人程度⁶⁵⁾、陪覧者は3,000人であり⁶⁶⁾、同時期に用いられた代々木練兵場と比較すると収容人数は少ないが、このような狭隘な敷地のなかでも、一般市民のため陪覧者スペースの確保が計られ、時代とともに拡張されたことが分かる。

5 観兵式における儀礼空間の特質

以上に述べた会場敷地の変遷とその利用形態の分析より、観兵式における儀礼会場の変遷とその儀礼空間の特質について、「会場敷地としての性質の異なる練兵場と宮城前広場の併用」と「敷地の利用形態における標準化と儀礼規模の拡大」という観点から総括する。

5-1 会場敷地としての性質の異なる練兵場と宮城前広場の併用

2、3節で見たように、観兵式の主要な会場となる練兵場は、明治から大正期にかけて、宮城から遠ざかるように東京西方へと移転を繰り返した。それに伴い、大規模な鹵簿が大山街道を中心に市街地を横断するようになり、観兵式は都市へと展開していった。その一方で、大正期以降、観兵式の会場として練兵場とともに宮城前広場が利用されるようになった。

ここで、本来観兵式の会場となるべき練兵場とともに、特定の目的を持たない「広場」である宮城前広場が併用された理由を考察す

べく、軍事儀礼の会場に必要もしくは重要とされる条件について、「①所有」、「②規模・形状」、「③立地」、「④由緒・風致」という4つの観点から整理したい。

まず「①所有」に関しては、観兵式の主催は軍部であるため、当然、対外的な手続きをすることなく使用できる陸軍所管の練兵場は会場敷地として適していた。一方で、式には天皇をはじめとする皇室が多く参列したために、大正天皇の体調不良を理由とした会場変更に見るように、その施行には宮内省が深く関与していた。軍用地でなくとも、宮内省所有の宮城前広場は比較的使用しやすかったと言える。

また、「②規模・形状」においては、数千から数万にも及ぶ軍隊の堵列、行進が可能なように、十分な面積を有する平坦な広場が必要とされた。日比谷練兵場は約19ha（拡張後は約32ha）、青山練兵場は約47ha、代々木練兵場は92haであるのに対し、宮城前広場は約47haであり、宮城前広場は代々木練兵場には劣るものの、他の練兵場と同等の面積を有していた。形状という点では、日比谷練兵場以外の練兵場は不整形であり、とくに代々木練兵場は地面の起伏や池があったのに対し、宮城前広場は整形で、植栽はあるものの銅像を除いて構築物はなく、さらに地面の起伏は少なかった。規模・形状の両方を考慮すると、同時期に利用された代々木練兵場と宮城前広場は同程度の適性を有していたと言える。

他方、「③立地」に関しては、天皇または皇太子が臨御し、なおかつ複数の聯隊が参集することを考えると、宮城または御所、各兵営からのアクセスの良さが重要であった。とくに、行幸啓の主要な出発地である宮城からの距離は日比谷練兵場が約1km、青山練兵場が約3km、代々木練兵場は約5kmであったのに対し、宮城前広場はほぼゼロであった。儀礼を対外的にアピールするうえでは、市街地における大規模な行幸啓を伴う遠方の練兵場の方が効果的である一方で、大正5~9年と昭和の戦中期の事例に見られたように、天皇の体調不良時や有事において行幸啓距離を短くしたい場合には、宮城前広場が圧倒的に有利であった。

そして「④風致」に関しては、観兵式は天皇が大元帥として臨御し、軍事力を誇示するための儀礼であることから、当然、それに相応しい風致が求められた。練兵場が常時の「軍隊の操練の場」と臨時の「軍事儀礼の場」としての用途を兼ねていたのに対し、宮城前広場は特定の用途を持たない広場であり、儀礼の開催を想定して景

Fig.13 Layout plan of imperial palace plaza, Rikugunhajime in 1916
宮城前広場の利用形態【大正5年陸軍始】

Fig.14 Layout plan of imperial palace plaza, Rikugunhajime in 1919
宮城前広場の利用形態【大正8年陸軍始】

観が整備されていたため、荘厳な軍事儀礼を行うにふさわしい風致が備わっていたと言える。また、原武史は大正期の観兵式における宮城前広場の利用について、政府は民衆に対して「ここ〔宮城前広場〕が特別な場所であることを示す必要」（〔 〕内引用者）があったため、観兵式の開催することによって「大元帥としての天皇像を全面に出そうとした」と指摘している⁶⁷⁾。宮城前広場は、儀礼のために整備されたがゆえに、練兵場よりも観兵式の会場に相応しい風致を備えており、また一方で、観兵式の開催によって、儀礼のための「聖なる空間」として広く認識されるようになっていったと言える。

以上より、宮城前広場は、「①所有」、「②規模・形状」に関しては3つの練兵場と同等の条件を備えていたが、「③立地」、「④風致」においては練兵場とは異なる性質を有していたことが指摘できる。とくに、3つの練兵場の中で宮城から最も遠い代々木練兵場とは、「③立地」という点において対照的であり、儀礼会場としてそれぞれ違う利点を有していたために、場合に応じて両者が使い分けられたと考えられる。

5-2 敷地の利用形態の標準化と儀礼規模の拡大

4節での分析により、観兵式における敷地の利用形態は、明治10年代から同20年代にかけて式の次第とともに定式化し、3つの練兵場と宮城前広場でほぼ同じ玉座と隊列の配置がなされたことが明らかとなった。先にみたように、本来は観兵式の会場としての利用を想定されていない宮城前広場における観兵式の挙行は、敷地の利用形態が標準化していたゆえに容易だったと言える。

そして、臨時で利用された宮城前広場を除外すると、練兵場の移転に伴って敷地面積が拡大したことにより、同じ利用形態ながらも、儀礼規模が拡大していったことが指摘できる。隊列図の分析を通じて、敷地の大半を占める兵士の隊列スペースのみならず、明治20年代以降の青山練兵場、代々木練兵場、宮城前広場での観兵式では、一般市民用の陪覧者スペースが時代とともに飛躍的に拡張していく現象が確認できた。一般市民の参加はあくまで自発的であったが、観兵式における市民の参加が促された背景には、「一般陪覧者の便利」を考慮する軍部や警視庁の配慮があったことには留意すべきである。

明治初期、閉ざされた皇城内で天皇と少数の関係者によって開始された観兵式は、市内の練兵場や広場で行われるなかで、都市の儀礼となっていく。そして、軍を統率する天皇と、閱兵を受ける兵士のみならず、会場や行幸経路で拝観する一般市民までもが儀礼の重要な参加者として位置づけられるようになったことが指摘できる。

おわりに

本稿では、観兵式における練兵場と宮城前広場の儀礼空間としての特徴を解明することにより、近代東京の軍都としての一側面を捉えた。最後に、近代東京の儀礼空間を俯瞰的に捉える視点から、本稿で扱った観兵式と、筆者がこれまで研究を行ってきた大喪儀と祝賀儀礼という性質の異なる儀礼との関連性に言及したい⁶⁸⁾。

まず、観兵式の主要な会場であった青山と代々木の両練兵場は、大正期、大喪儀の式場として利用された。4節で見たように、青山練兵場では大正元年に明治天皇大喪儀が催され、敷地に葬場殿跡と中央の通路が残されたことにより、以後の観兵式ではそれらを避けるように隊列が組まれるようになった。一方、代々木練兵場では大正3年に昭憲皇太后大喪儀が催され、大正5年に観兵式での利用が

開始された際には、葬場殿跡の脇に玉座が設置され、以後もそれが踏襲された。両練兵場における観兵式と大喪儀の時間的な前後関係は異なるが、大喪儀での利用が、観兵式での敷地の利用形態に影響を与えたという点は共通している。

他方、宮城前広場では大正末以降、紀元2600年記念式典（昭和15年）など天皇が臨御する多くの祝賀儀礼が催された。観兵式の玉座は宮城正門の脇に置かれたが、その位置は祝賀儀礼の際に玉座が置かれた仮設の式殿とほぼ同位置であった。儀礼の次第や内容は異なるものの、天皇と大人数の兵士または参列者が対峙する会場の空間構成は類似していたことが指摘できる。

このように、観兵式の会場とされた練兵場と宮城前広場は、大喪儀や祝賀儀礼の会場としても利用されており、そうした同一敷地における異なる性質の儀礼での敷地利用は相互に影響しあい、また共通する要素もあった。別稿にて観兵式の経路の分析を行い、本稿の分析結果と統合して軍事儀礼の都市的な広がりを明らかにしたうえで、異なる種類の儀礼を横断的に捉え、近代東京の儀礼空間の全体像を解明することを今後の課題としたい。

注

- 1) T・フジタニ『天皇のページェント』日本放送出版協会、1994年。
- 2) 荒川章二「首都の軍隊の形成」『地域のかなの軍隊2』吉川弘文館、2015年。
- 3) 軍用地・官用地の整備過程については、経済史では石塚裕道『日本資本主義成立史研究』（吉川弘文館、1973年）、小木新造『東京庶民生活史研究』（日本放送出版協会、1979年）、都市史では鈴木博之『日本の近代10 都市へ』（中央公論新社、1999年）、陣内秀信『東京の空間人類学』（筑摩書房、1985年）などで論じられている。皇宮地・宮内省所管官有地を前身とする御料地の整備過程は、三浦涼・佐藤洋一「東京中心部における皇室御料地の形成過程」（『日本建築学会計画系論文集』540号、2001年2月、pp. 229-236）に詳しい。軍用地・御料地の戦後の用地転用については、佐藤昌『公園緑地発達史上巻』（都市計画研究所、1997年、pp. 434-443）、今村洋一「戦後復興期における東京の公園緑地計画に対する旧軍用地の影響について」（『日本都市計画学会都市計画論文集』47巻3号、2012年10月、pp. 727-732）にて、戦後の公園緑地形成に多大な影響を与えたことが指摘されている。
- 4) 吉田律人「渋谷周辺の軍事的空間の形成」（『歴史のなかの渋谷』雄山閣、2011年）、および武田尚子「近代東京における軍用地と都市空間―渋谷・代々木周辺の都市基盤の形成―」（『武蔵大学総合研究所紀要』21号、2011年）。
- 5) 越沢明『東京都市計画物語』（日本経済評論社、1991年）、小野良平「明治期東京における公共造園空間の計画思想に関する研究」1999年東京大学学位論文（『公園の誕生』（吉川弘文館、2003年所収））。
- 6) 原武史『増補 皇居前広場』光文社、2007年。
- 7) 宮内庁編『明治天皇記 第1～12』（吉川弘文館、1968年～1977年）、「大正天皇実録 巻1～85」（宮内公文書館所蔵、識別番号：60001～60085）、宮内庁編『昭和天皇実録 第1～18』（東京書籍、2015～2016年）。
- 8) 式の次第が定式化する以前の明治初期の観兵式や臨時の観兵式に関しては、各天皇紀に参加者や次第が詳述される場合もある。
- 9) 例えば、現・皇居の場合、明治2年～同21年は「皇城」、同21～昭和22年は「宮城」、それ以降は「皇居」と表記する。
- 10) 宮内庁『明治天皇紀 第2』、吉川弘文館、1969年、254～255頁。
- 11) 首都に常駐する東京鎮台は明治4年8月に設置され、同21年5月に廃止されて師団となった。一方、天皇の護衛兵である近衛兵は明治初年の御親兵がもととなり明治5年に設置され、同24年に近衛師団となった。
- 12) 陸軍始は毎年1月8日もしくはその前後に実施された。天皇の誕生日にあたる天長節は、明治初年～5年は9月22日（旧暦）、同6年以降の明治年間には11月3日、大正期は8月31日、昭和期は4月29日であった。なお、大正期には、天長節当日は暑さが厳しいため、2ヶ月後の10月31日を天長節祝日と定め、天長節祝日に観兵式が行われた。
- 13) 明治13年1月31日陸軍省達乙3号「飾隊を観兵式と改正及仮規則の件」（防衛省防衛研究所所蔵、請求番号：陸軍省-大日記-M13-73-102）。
- 14) 明治20年1月19日陸軍省達第5号「陸軍敬礼式同附録及観兵式仮規則ヲ廃止ス」（国立公文書館所蔵、請求番号：類22293100）。
- 15) 明治24年11月30日陸軍省達第169号「陸軍礼式附録ヲ定ム」（国立公文書

- 館所蔵、請求番号：類00553100)。
- 16)「陸軍礼式令」昭和15年、軍令陸第3号(『官報』昭和15年1月26日、765頁)。
- 17)Fig. 1にて、日比谷練兵場の拡張前の敷地境界線を点線で示した。
- 18)なお、博覧会は財政難により実現せず、青山練兵場の跡地には大正期に明治神宮外苑が造営された。その詳細は古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』(中央公論社、1998年)、山口輝臣『明治神宮の出現』(吉川弘文館、2005年)に詳しい。
- 19)注6前掲書、64～72頁。
- 20)観兵式は、実施予定であったにも関わらず、悪天候や天皇の体調不良により直前に中止される場合もあった(Table. 1にて○、◇、☆で表記)。また、皇族の喪中や戦時中には、毎年恒例の陸軍始と天長節の観兵式はそもそも企画されず、非開催とされた。
- 21)注10前掲書、389～390頁。
- 22)日本における近代陸軍の始まりとされる鎮台の設置は明治4年、徴兵制の開始は明治6年であり、日比谷練兵場の設置とほぼ同時期である。
- 23)注10前掲書、543頁。
- 24)注10前掲書、625頁。
- 25)注10前掲書、764頁。
- 26)『読売新聞』1915年6月26日、朝刊、5頁。
- 27)初めて代々木で観兵式が挙行された大正6年の天長節の際に「演習を目的としたる為め起伏地多く違つて一般拝観場の設備其他に不便歟からざる」と報じられていることから、敷地の起伏に関する問題は解決を見ないまま、観兵式の敷地は代々木練兵場へと移行したことが分かる(『東京朝日新聞』1917年10月13日、朝刊、6頁)。
- 28)注1前掲書。
- 29)「大正天皇実録 巻54」13頁(宮内公文書館所蔵、識別番号：60054)。
- 30)『東京朝日新聞』1914年1月10日、朝刊、4頁。
- 31)『原敬日記 第3巻』、福村出版、1965年、322頁。
- 32)当初は4月3日説も検討されたが(『東京朝日新聞』1914年1月18日、朝刊、2頁)、5月5日説が最終候補となり、陸軍大臣から日程変更が奏請されたと報じられている(『読売新聞』1914年4月6日、朝刊、2頁)。管見の限り、観兵式日程変更に関する公文書等は残されておらず、宮中と陸軍でどのように話が進められたのかは不明である。
- 33)『東京朝日新聞』1915年12月29日、朝刊、3頁。
- 34)注6前掲書、51～52頁。
- 35)宮内庁『昭和天皇実録 第7』、東京書籍、2016年、266頁。
- 36)宮内庁『昭和天皇実録 第9』、東京書籍、2016年、528頁。
- 37)注9 前掲書、254～255、543頁。
- 38)日比谷練兵場で実施された飾隊式・観兵式の次第書が含まれる資料は以下の通り。なお、防衛省防衛研究所蔵資料は所蔵先の表記を省略した。明治5年天長節：「陸軍省日誌明治五年第二八号」(請求番号：陸軍省-陸軍省日誌-M5-2-13)、明治6年天長節 [Fig. 2]：「陸軍省日誌明治六年第五三号」(請求番号：陸軍省-陸軍省日誌-M6-4-19)、明治12年天長節 [Fig. 3]：「明三天長節飾隊式順序等差出」(請求番号：陸軍省-卿官房-M12-6-26)、明治12年グラント将軍歓迎 [Fig. 4]：「練兵場に於て天覧の節繩張云々工兵方面へ」(請求番号：陸軍省-大日記-M12-53-109)、明治13年天長節：「陸軍省受領 第二四二号」(請求番号：陸軍省-大日記-M13-37-66)、明治17年天長節：「比谷練兵場における諸兵観兵式施行要請の通知」(請求番号：参謀本部-雑-M17-1-99)、明治18年陸軍始：『官報』第405号(1885年1月7日)、明治18年天長節：『官報』第454号(1885年11月2日)、明治19年陸軍始：『官報』第751号(1886年1月6日)、明治20年陸軍始 [Fig. 5]：「陸軍始観兵式手続予定ム」(国立公文書館所蔵、請求番号：類00293100)
- 39)明治12年のグラント将軍歓迎の次第書のみ隊列図が2点(閲兵時・奉送時)で、その他の観兵式の隊列図は3点である。
- 40)「練兵場に於て天覧の節繩張云々工兵方面へ」(防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-大日記-M12-53-109)、「一より操練等天覧の節繩張人為繩張の伺」(防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-大日記-M12-30-86)。
- 41)注40前掲資料「練兵場に於て天覧の節繩張云々工兵方面へ」。
- 42)明治20年～同24年に青山練兵場にて実施された初期の10件の観兵式は、当時の『官報』に次第書が掲載されている。明治25年以降は、陸軍省作成の次第書が実施年の『陸軍省大日記』もしくは『海軍省公文備考類』(ともに防衛省防衛研究所蔵)に収められている。
- 43)各隊列図が掲載された次第書の資料情報は以下の通り。
明治22年天長節 [Fig. 7]：「明治二二年十一月三日天長節観兵式手続」(防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-壹大日記-M22-4-10)、明治37年天長節 [Fig. 8]：「明治三十七年十一月三日天長節観兵式二関スル命令」

- (防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-貳大日記-M37-11-72)、大正4年天長節 [Fig. 9]：「大正四年十月三十一日天長節祝日観兵式二関スル命令」(防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-大日記乙輯-T 4-1-20)。
- 44)『読売新聞』1894年1月9日、別刷、1頁。
- 45)『読売新聞』1906年5月1日、朝刊、2頁。
- 46)『東京朝日新聞』1915年12月3日、朝刊、4頁。
- 47)例えば、明治31年には学習院と成城学校からの団体拝観の請願書が確認できる(「学習院生徒観兵式陪観の件」防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-壹大日記-M31-10-15、および「生徒観兵式拝観の件」防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-壹大日記-M31-11-16)。
- 48)「天長節観兵式陪観証増数の件」防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-壹大日記-M33-5-19。
- 49)『読売新聞』1904年11月2日、朝刊、2頁。
- 50)明治天皇大喪儀の葬場殿跡については、拙稿「近代東京における大喪儀の儀礼空間に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』(82巻738号、pp. 2081-2087、2017年)参照。
- 51)代々木練兵場における観兵式のうち、次第書が確認できるのは大正6年天長節、大正8年平和記念観兵式、大正8年天長節、昭和7年陸軍始、昭和13年陸軍始、昭和15年紀元2600年記念観兵式の7件である。このうち、紀元2600年記念観兵式以外の6件は、陸軍省作成の次第書が実施年の『陸軍省大日記』または『海軍省公文備考類』(ともに防衛省防衛研究所蔵)に収められている。紀元2600年記念観兵式の次第書は「紀元二千六百年記念式典記録 第六冊」(国立公文書館所蔵、請求番号：紀00006100)に収められている。
- 52)各隊列図が掲載された次第書の資料情報は以下の通り。
大正6年天長節 [Fig. 10]：「大正六年十月三十一日 天長節祝日観兵式二関スル命令」(防衛省防衛研究所蔵、請求番号：海軍省-公文備考-M6-10-2005)、昭和3年天長節 [Fig. 11]：「昭和三年一月八日 陸軍始観兵式二関スル命令」(防衛省防衛研究所蔵、請求番号：海軍省-公文備考-S 2-22-35-7)、昭和13年陸軍始：「陸軍始観兵式二関スル命令」(防衛省防衛研究所蔵、請求番号 [Fig. 12]：海軍省-公文備考-S 12-49-5214)。
- 53)宮内庁編『昭和天皇実録 第5』東京書籍、2016年、246頁。
- 54)宮内庁編『昭和天皇実録 第8』東京書籍、2016年、213頁。
- 55)「平和記念観兵式陪観證発行の件」(防衛省防衛研究所蔵、請求番号：陸軍省-欧受大日記-T 8-7-36)。
- 56)「紀元二千六百年祝典記録 第六冊」(国立公文書館所蔵、請求番号：紀00006100) 113頁。
- 57)昭憲皇太后大喪儀の葬場殿跡については、拙稿「近代東京における大喪儀の儀礼空間に関する研究」(『日本建築学会計画系論文集』82巻738号、2081～2087頁、2017年)参照。
- 58)藤原頼生「昭憲皇太后大喪儀葬場殿跡碑の建立について」『明治聖徳記念学会紀要』2014年11月、468～481頁。
- 59)『読売新聞』1917年10月14日、朝刊、5頁。
- 60)宮城前広場で実施された観兵式のうち、大正5～7年の陸軍始は、陸軍省作成の次第書が実施年の『海軍省公文備考類』(防衛省防衛研究所蔵)に収められている。なお、昭和の2件は例外的に会場が変更されたため、事前に次第書や隊列図が作成できなかったものと考えられる。
- 61)各隊列図が掲載された次第書の資料情報は以下の通り。
大正5年陸軍始 [Fig. 13]：「大正五年一月八日陸軍始観兵式二関スル件」(請求番号：海軍省-公文備考-T 5-17-1889)、大正7年陸軍始 [Fig. 14]：「大正七年一月八日陸軍始観兵式二関スル件」(請求番号：海軍省-公文備考-T 7-13-2125)。
- 62)『朝日新聞』1916年1月7日、朝刊、5頁。
- 63)なお、Fig. 13、14にて黒塗りで示された部分は、凡例に「列外小隊及初年兵」とあり、3つの練兵場では見られなかった表記である。隊列のスペースが十分に確保できないために、一部の兵士は分列式に参加せずに「列外」にされたものと考えられる。
- 64)『読売新聞』1916年12月24日、朝刊、5頁。
- 65)大正5年の陸軍始の参加兵士数は2万人(『読売新聞』1916年1月9日、朝刊、5頁)、同6年の陸軍始は17,000人(『読売新聞』1917年1月9日、朝刊、5頁)、同7年の陸軍始は15,000人(『東京朝日新聞』1918年1月7日、朝刊、5頁)と報じられている。
- 66)『読売新聞』1916年1月8日、朝刊、5頁。
- 67)注6前掲書、51～52頁。
- 68)注57前掲論文および拙稿「近代東京の奉祝行事における式殿建築 ―「御殿風」建築の系譜と変遷―」(藤井恵介先生献呈論文編集委員会『建築の歴史・様式・社会』中央公論美術出版社、13-25頁、2018年)。

SITES AND ITS USAGE PATTERN OF *KANPEISHIKI*

Study on military ceremonial space in modern Tokyo, Part 1

Kaori HASEGAWA ^{*1}

^{*1} Assist. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Technology, Tokyo University of Science, Dr.Eng.

At the beginning of Meiji Period, modern military system was installed in Japan, modelled after Western countries. Since then, military ceremony, as well as its manners and regulations, had been consolidated. Among them, *Kanpeishiki*, Japanese military parade conducted in the presence of the Emperor as *Daigensui* (Commander-in-chief), is one of the most significant Imperial ceremony in modern Tokyo, involving the general public in the city.

This study aims to clarify the characteristics of ceremonial space used for *Kanpeishiki* in modern Tokyo, focusing on temporary use of three parade grounds (Hibiya, Aoyama, and Yoyogi) and the Imperial Palace Plaza from Meiji Period to pre-war Showa Period. Since those parade grounds and Imperial estates had covered large areas in the city, it is important to characterize their ceremonial use in understanding urban formation of modern Tokyo, especially as a military city.

In the second chapter, the forming process of *Kanpeishiki* and the development process of those sites are reviewed as a premise for this study. Parade grounds in Tokyo, established for military training and its ceremony, had been redeployed twice with the influence of military and political factors, receding from the Imperial Palace. On the other hand, the Imperial Palace Plaza, developed as a symbolic plaza in the center of Tokyo, had become sacred space by being used as a site of imperial ceremony including *Kanpeishiki*.

The third chapter shows the site transition of *Kanpeishiki* by creating the chronological table. *Kanpeishiki*, started as a closed ceremony inside the Imperial Palace within the Emperor and limited people at the beginning of Meiji Period, had become a public ceremony in the city by being conducted in parade grounds. On the other hand, the Imperial Palace Plaza also started to be used for *Kanpeishiki* from the end of Taisho Period.

In the fourth chapter, the procedure and the usage pattern of each site are revealed by analyzing operation manuals of *Kanpeishiki* made by the army. As well as the procedure, the site usage pattern has been formulated from the 1870's through the 1880's in Hibiya Parade Ground. The basic layout plan of the Emperor and troops is almost common among three parade grounds and the Imperial Palace Plaza, but the scale of ceremony had become larger, especially the space for the general public.

In conclusion, the present study demonstrates that sites used for *Kanpeishiki* in modern Tokyo has the following characteristics.

- 1) The parade grounds had been used as main ceremonial sites from Meiji period to pre-war Showa Period, and those sites had moved westward due to redeployment of military reservation. On the other hand, the Imperial Palace Plaza was also used occasionally as a ceremonial site. Three parade grounds and the Imperial Palace Plaza met conditions necessary for ceremonial use of *Kanpeishiki* regarding possession, size and figure, but they have different characteristics in scenic beauty and location. It is presumed that this difference led to combination use of parade grounds and the Imperial Palace Plaza.
- 2) The basic site usage pattern was formulated and basically common among three parade grounds and the Imperial Palace Plaza, on the other hand, its scale had become larger to accommodate thousands of people. It can be said that this formulation enables the Imperial Palace Plaza, not originally established for military purpose, to be used as a site of *Kanpeishiki*. Additionally, it can also be pointed out that not only the Emperor and soldiers but also the general public had come to be positioned as important participants of military ceremony by the nation.

(2019年3月8日原稿受理, 2019年9月26日採用決定)